

スピーカーアキュライザーの導入(16)
—アナログ対デジタル(2)—

1. 始めに

前報(15)に引き続き、アナログ音源とデジタル音源の比較を行ってみます。

2. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴方法

スピーカーアキュライザーSPA-7の設定条件は前報(2)に述べたとおりとしますが、ケーブルの接続条件を前報(14)のとおり替えています。

試聴音源はブルックナーの交響曲4番と7番に固定し、アナログ盤、CD、STAGE+から選択します。

ブルックナー交響曲4番

アナログ盤

LONDON SOL 1003-4

カール・ベーム指揮ウイーンフィル

CD

ドイツグラモフォン UCCG-1789

アンドリス・ネルソンス指揮ライプチヒゲヴァントハウス

STAGE+

アンドリス・ネルソンス指揮ライプチヒゲヴァントハウス

ブルックナー交響曲7番

アナログ盤

BERLINER PHILHARMONIKER RECORDINGS KKC-1167/8

ベルナルド・ハイティンク指揮ベルリンフィル

CD

RCO 15005

マリス・ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウ

STAGE+

アンドリス・ネルソンス指揮ライプチヒゲヴァントハウス

3. スピーカーアキュライザーSPA-7の試聴結果

アナログ盤はLP-12、CDはEMT981、STAGE+はPC経由で再生します。

ブルックナー交響曲4番のカール・ベーム指揮ウイーンフィルのアナログ盤は、1974年の発売です。ソフトな楽器の質感表現ではありますが、ブルックナーらしい

壮大なスケール感で広大な音場の広がり感があります。

アンドリス・ネルソンス指揮ライブチツヒゲヴァントハウスの CD は、2017年の録音で、2019年の日本公演の際に求めてきました。ブルックナーらしい流れるような弦楽の弱音から、壮大な総奏まで、これまでの CD らしい固い音は後退し、ダイナミックな演奏が展開されます。

アンドリス・ネルソンス指揮ライブチツヒゲヴァントハウスの STAGE+は、画面の画像が同じですので。CD と同じ収録のマスターからのアルバムの配信のようです。演奏そのものは CD と全く同じでダイナミックな演奏が展開されます。音質はほとんど CD と変わりませんが、CD がやや厚みがあるウォームトーンであるのに対し、STAGE+はクールでディテールを描き分けています。

以上、3種の音源とも以前とは様変わりしています。CD と STAGE+も最近の収録だけあって、アナログに引けを取らず健闘しています。

ブルックナーの交響曲 7 番のハイティンク指揮ベルリンフィルアナログ盤は、2019年のベルリンフィルにおけるライブ演奏のダイレクトカット盤です。ダイレクトカットの最新録音というだけあって、繊細かつ緻密な質感とベルリンフィル大ホールの響きを再現しており、ハイティンクが引退前に取り上げた渾身のブルックナーです。スピーカーアキュライザー導入後初めて聴くものですが、ライブ感を満喫でき、ダイレクトカット盤の真価を知らしめてくれました。

ヤンソンス指揮アムステルダムコンセルトヘボウの CD は、2012年コンセルトヘボウにおけるライブ録音です。CD とは思えないほど、繊細な表現もあり、演奏の確かさとコンセルトヘボウのホールの音の良さまで味わせてくれます。

アンドリス・ネルソンス指揮ライブチツヒゲヴァントハウスの STAGE+は、2018年のゲヴァントハウス創立 275 周年記念の演奏会の映像付きの収録です。これも配信とは思えない緻密な表現もあり、ゲヴァントハウスらしい重厚な演奏が聴きどころです。

以上、3種の音源とも以前とは様変わりしています。アナログはダイレクトカットの最新録音盤であり、CD と STAGE+も最近の収録だけあって、アナログに引けを取らず、いずれもそれぞれの持ち味を十分に活かしています。

4. まとめ

大編成のブルックナーの二つの交響曲について 3種の音源とも以前とは様変わりしています。アナログは古い録音とダイレクトカットの最新録音それぞれの持ち味が発揮されており、CD と STAGE+も最近の収録だけあって、アナログに引けを取らず、いずれもそれぞれの持ち味を十分に活かしています。

以上